

# 2022（令和4）年度全日本大会担当候補者審判研修 映像分析（解答例）



お忙しい中にもかかわらず、映像研修にお取り組みいただきありがとうございます。

以下に回答例及び映像分析、レフェリングにおけるキーワードを記載させていただきます。

皆様方からの回答を拝読させていただき、以下の内容以外にも鋭い視点で観察されているものもありました。皆さんがそれぞれに考えられたことを大切にされ、以下の見解を参考にしながら、レフェリングの「土台」を作り上げてください。

日本ハンドボール協会  
競技・審判本部

映像 番号	分 析
1	<p><b>keyword</b> 新傾向、肩での接触、攻撃側の違反 vs 7mスロー、ゴールレフェリーの視点</p> <p>判定 事象1：アドバンテージ → 得点 + 即座に2分間退場 事象2：アドバンテージ → 得点 + 即座に2分間退場 事象3：7mスロー 事象4：7mスロー</p> <p>分析 4つの映像とも、シュート直前、ゴールエリアライン際での防御側（以下、DF）との接触シーンです。これらは、ゴールレフェリーが全て判定する事象となり、判定の際の視点の1つ目は、「<b>どちらが先に、接触した地点に到達しているか</b>」となります。</p> <p>これまで各研修でお伝えしてきたこの視点に加えて、皆さんに新しく持っていただきたい観察のポイントが、DFが「<b>最初の接触部分として肩を使っていないか</b>」（つまり<b>相手に対して正面での接触</b>を試みているかどうか）です。これは、<b>DFの新しい傾向</b>とも言えます。</p> <p>映像のように、接触した地点に最初にいたのがDFであったとしても、<b>肩を攻撃側プレーヤーの方向に向けて</b>接触を試みている場合、<u>レフェリーは攻撃側の違反を判定してはいけません</u>。</p> <p>事象1に関しては、空中でシューターの後ろから肩を使って接触（青13）あるいはシュートを試みる腕への接触（青8）から、どちらか一方の選手に対し、<b>即座に2分間退場</b>を判定します。ゴールレフェリーの領域ではありますが、コートレフェリーの位置からもこれらの行為は観察できるため、通信機器を通して、あるいはコートレフェリーが前に移動することで、ゴールレフェリーに「起きていること」を伝えることも可能かと思えます。</p> <p>事象2は、高速で走る相手に対し<b>横から（肩を使って）</b>ぶつかっており、<b>即座に2分間退場</b>を判定します。この事象を判定したレフェリーは、コート中央で接触により倒れている事象を観察し続けたがために遅れてのスタートとなり、シュート時の接触を横から、かつ走りながら観察することになり、正しく判定することが難しい状況だったと言えます。レフェリーは先にアウトゴールラインまで移動し、あるいは選手を先に走らせることで止まって正確に観察する、もしくは通信機器が使用できる状況であれば、ペアからの伝達（サポート）により判定することで、正しい判定へとつながっていきます。</p> <p>事象3の場面で判定したレフェリーは、反対側のコートへの移動がバックステップからスタートしており、一番肝心な接触場面を、横から、かつ走りながら観察する結果となっています。この事象3は、<b>学生やシニアレベルにおいては</b>、シュートを試みている選手も相手（DF）を認識できている、DFも相手と一緒に動きながら（ただし肩で）の接触であることから<b>罰則は不要</b>となります。ただし<b>カテゴリーによっては</b>、危険性を軽視した違反行為となり得るため、即座に2分間退場の判定もあります。</p> <p>上記事象1、2、3の考え方から、<b>事象4</b>についても同様に攻撃側の違反ではなく、<b>事象1、2</b>はボールがゴールに入っていることからレフェリーは慌てて中断することなくまずは<b>得点</b>を認め、<b>事象3、4</b>は接触によりシューターの明らかな得点チャンスを妨害していることから<b>7mスロー</b>を判定すべきです。</p> <p><b>競技規則</b> 8:3、8:4、14:1a、14:2、解釈6ab、16:3c</p>
2	<p><b>keyword</b> バランス、ゲーム局面の理解、先に位置を取った選手</p> <p>判定 事象1：攻撃側の違反（オフェンスファール） 事象2：攻撃側の違反（オフェンスファール）</p> <p>分析 わずか10秒の攻防において、それぞれのチームに連続して起きた似たような事象に対する、レフェリーの判定です。</p> <p>事象1でDFは、接触した地点に最初に位置しており、<b>攻撃側（以下、OF）の方向へと動くことなく相手に対し正面に立っており、攻撃側の違反（オフェンスファール）</b>であることは、明らかと言えます。もちろん、ゴールエリア際の事象であるため、ゴールレフェリーが判定することになります。</p> <p>事象2に関しては、事象1ほど明確に攻撃側の違反（オフェンスファール）とは言えない部分もあります（DFはしっかりと止まっていない、多少大げさに振る舞っている…）。</p> <p>この連続した2つの事象において皆さんに最も伝えたいことは、「<b>判定のバランス</b>」です。<b>局面理解</b>におけるレフェリーあるいは両レフェリー間の<b>判定におけるバランスが悪いと、チームの混乱を招くこと</b>になります。映像のようにそれぞれのチームに対して発生した、<b>短期間での、似たような事象へのレフェリーの統一された判断</b>は、両チーム・選手からの信頼にもつながる判定だと言えます。</p> <p>ただしもしも事象2で、DFが前へと大きく動いている、あるいは相手との接触の前からDFが倒れ始めている（違反に見せかけている）など<b>明らかであるならば</b>、判定のバランスを取る（攻撃側の違反を判定する）必要はありません。</p> <p><b>競技規則</b> 8:2d、13:1a</p>

映像番号	分析
3	<p><b>keyword</b> 攻撃側の違反 vs 7mスロー、ゴールレフェリーの視点、先に位置を取った選手、隙間を完全に閉じる</p> <p>判定 事象1：攻撃側の違反（オフENSIBファール） 事象2：フリースロー</p> <p>分析 同じチームの異なる時間帯における、似たような場所からカットインを試みているシーンです。</p> <p><b>事象1</b>で1枚目と2枚目のDFの間は、接触の前からしっかりと閉じられており、2人のDFとも移動時、接触時共に、ゴールエリアの<b>外</b>からの移動、接触です。 2枚目のDFが、肩から相手に向かっていようにも見えるかもしれませんが、DFはOFよりも先に、かつ相手に対して<b>正面</b>で位置を取っています。チームメイトと共に<b>完全に閉じられた</b>スペースを、相手OFは突破することができません。 これらは、ゴールレフェリーが<b>オフENSIBファール</b>を判定するための判断材料となり得ます。</p> <p><b>事象2</b>に関しては、事象1の状況とは異なっていると言えます。 映像で2枚目のDFは、接触した地点へ<b>遅れて</b>きており、1枚目のチームメイトの方向へと相手を軽く押すことで、チームメイトとの間のスペースを閉じることを成功させています。 先に位置を取っていた1枚目のDFは、ゴールエリアの<b>外</b>からの接触となります（押し込まれ、最終的にゴールエリアの中に入っています）。 この2つの状況からOFは、<u>明らかな得点チャンスを得ているとは言えません</u>。</p> <p>事象2の映像で<b>最初に起きた違反</b>は、2枚目のDFの相手を押す行為であり、<u>正しい判定は、フリースロー</u>となります。</p> <p>この2つの映像から、このような状況でのレフェリーの判定は、決して容易ではないことを示していると言えます。</p> <p><b>競技規則</b> 8:2d、13:1a（事象1） 8:2b、8:3a、13:1b、解釈6a（事象2）</p>
4	<p><b>keyword</b> 総合的に捉えた判定、アドバンテージ、前半立ち上がり、基準づくり</p> <p>判定 OFチームへのフリースロー + DFに対して段階的罰則の適用</p> <p>分析 この映像は、速攻の際に同じ選手が行った2つの行為に対して、<b>レフェリーとしてどう捉え、判定したらよいか</b>の一例として、皆さんにお伝えできる映像となります。</p> <p>まず1つ目として、白チームが速攻に転じている際に、DFを行うために交代しコートに入ってきた選手が、ボールを運ぶ相手チームの選手に対して、ボールを持つ手とは反対側から接触を試み、さも相手が<b>ぶつかってきたかのように</b>振る舞っています。 この接触は<b>相手に向かって動いて</b>の行為であり、<b>攻撃側の違反（オフENSIBファール）</b>を判定することはできません。 またこの接触にもかかわらず、ボールを持つ選手はプレーを継続できる状況にあるため、レフェリーはプレーを中断しこの行為を注意するよりも、まずは<b>アドバンテージ</b>を優先させる必要があります。</p> <p>次に、アドバンテージによりプレーを継続する相手チームの選手に対して、先ほどと同じ選手がそのままついていき、相手がシュートを打つまで、些細ではありますが、横から接触し続けています。</p> <p>この2つの状況をレフェリーは<b>総合的に捉え</b>、かつ、前半立ち上がりでもあり、<b>いずれのアクションも許されていない</b>ことを当該選手だけでなく<b>全体に伝える機会</b>として、<b>段階的罰則（以下、YC）を適用</b>しています。</p> <p>この場面でレフェリーは、YCの適用と併せて<b>人間性を伴うインフォメーション</b>や<b>はっきりと伝わるボディランゲージ（以下、BL）</b>を用いて示すことが大切となります。</p> <p>また映像のように、DF側のチーム役員がレフェリーへコンタクトを求めていることに対して、<b>穏やかに</b>（競技開始早々、相手も落ち着いている場面です）<b>かつ端的にコミュニケーション</b>を取ることは、試合を進める上で大切な要素となります。 レフェリーはコート上のみならず、両チームの交代地域（特にチーム役員）にも気を配り、<b>今、相手が何を求めているのか</b>察知することも、チームからの信頼へとつながる一つの要素となります。</p> <p><b>競技規則</b> 8:3、8:7、13:1b、13:2、16:1a</p>
5	<p><b>keyword</b> シュートを打ち切っている、安易な7mスロー、DFへの正しい評価</p> <p>判定 プレーの継続（ゴールキーパースロー）</p> <p>分析 白チームは速攻を仕掛けており、ボールを持った選手は、相手チームの1枚目と2枚目の間にできたオープンスペースから、カットインシュートを試みています。</p> <p>1枚目のDFは、シューターと多少の接触はあるもののゴールエリアの<b>外</b>に位置しており、その接触も些細なものです。シューターも、<b>ボディコントロールやボールコントロールを失うことなくシュートを打ち切っています</b>（ゴールキーパー（以下、GK）をよく観察し、ループシュートを打っています）。</p> <p>この状況のようにシューターが、ボールと体をコントロールした状態でシュートを打ち切っているのであれば、レフェリーは安易に7mスローを与えるのではなく、<b>DFを評価し、プレーの継続を認めなければいけません</b>。</p> <p>映像でゴールレフェリーは、最終局面で、<b>極端に身をかがめて観察</b>をしようとしています。最終局面に合わせた大きなレフェリーの動作は、時として<b>視野を狭くし、正しく観察できないことがある</b>ため注意が必要です。</p> <p><b>競技規則</b> 14:2</p>

映像 番号	分 析
6	<p><b>keyword</b> 明らかな得点チャンスの妨害、連続して起きた2つの違反、緊張感を与えるレフェリーの協議</p> <p>判定 7mスロー + 即座に2分間退場（黒19番または黒22番のいずれかに対して）</p> <p>分析 赤チームが速攻を仕掛ける中、シュートを試みる選手に対してDFは、<b>最初に接触した者は後方から押し、次に接触した者はボールを持つ腕に対して接触</b>をしています。 映像でレフェリーは7mスローの判定の後、直ちに競技を中断、ペアで寄って短い協議を行っています。</p> <p>この映像で皆さんにお伝えしたいことは、<b>2人の選手に対して2つの2分間退場を与えることはできない</b>ということです。</p> <p>この状況でレフェリーは、<b>どちらか1つを選択</b>しなければならず、そのための<b>ペアでの協議</b>が必要となります。 違反を受けた選手の状況を確認しつつ、ペアでの協議の後にレフェリーは、映像には映っていませんがシューターの腕に対して接触をした選手（黒19番）に対して、即座に2分間退場を判定しています。 もちろん、最初のきっかけとなった相手を押した選手（黒22番）に対して、即座に2分間退場を判定することも可能です。</p> <p>シューターは<b>明らかな得点チャンスを妨害</b>されており、<u>7mスロー</u>。 <u>違反を犯した2名の選手（黒19番、黒22番）のうちいずれか1名を、即座に2分間退場とすることが、正しい判定となります。</u></p> <p><b>競技規則</b> 8:4a d、8:3c d、14:1a、解釈6a、16:3c</p>
7	<p><b>keyword</b> 掴み続ける、明らかな得点チャンスの妨害</p> <p>判定 7mスロー + 即座に2分間退場（赤99番）</p> <p>分析 映像では、ボールを持ったOFがジャンプフェイントからカットインを試みた際に、最初に接触をしているDF（赤99番）は、ボールではなく、相手選手のユニホームを<b>後方から掴み続けて</b>います。</p> <p>レフェリーはこの行為に対して、<u>即座に2分間退場を判定</u>しなければいけません。 もちろんOFには、3歩3秒の権利がありますので、レフェリーは早まって競技を中断しないよう、<b>アドバンテージ</b>を認める必要があります。</p> <p>次に、違反をされながらもシュートを試みているOFが、明らかな得点チャンスを得ているかどうかについてですが、シューターの正面に位置しチームメイトのカバーを試みているプレーヤー（赤44番）は、明らかにゴールエリアの中からの防御活動であり、それ以外のDFの<b>誰も、シューターを正当に守ることができる状況にはありません</b>。 シューターは、明らかな得点チャンスを得ていると言えます。</p> <p>以上のことから、映像のゴールレフェリーの判定は正しいと言えます。 ゴールレフェリーは、<b>穏やかに7mスロー</b>を判定し、<b>はっきりと大きなジェスチャー</b>を用いて、即座に2分間退場を判定した根拠を示しています。</p> <p><b>競技規則</b> 8:4b、14:1a、解釈6a、16:3c、13:2</p>
8	<p><b>keyword</b> アドバンテージ、ウィング、ゴールエリア内で倒れているコートプレーヤー、シュートへの影響</p> <p>判定 アドバンテージ → 7mスロー</p> <p>分析 この映像のように、右バックコートプレーヤーのパスからウィングプレーヤーがシュートを打つまでの状況では、ゴールレフェリーとして2つの事象に関する判断が求められます。</p> <p>まず1つ目の判断は、1枚目のDFが2枚目を守るチームメイトと協力しオープンスペースを閉じようと試みている場面です。 たしかにオープンスペースは閉じられていますが、DFはボールを持った<b>OFの方へと移動しながら接触</b>しているため、レフェリーは攻撃側の<b>違反（オフENSIBフアール）</b>を判定することができません。</p> <p>またボールを持ったOFは、味方のウィングプレーヤーへパスをすることが可能であるため、レフェリーは<b>アドバンテージ</b>を認めなければいけません（この時点で、ゴールレフェリーの判断は正しいと言えます）。</p> <p>次にウィングプレーヤーにパスが渡りシュートを試みている場面ですが、相手と接触した一枚目のDFが<b>ゴールエリア内に倒れて</b>しまっています。</p> <p>ゴールエリア内、<b>ジャンプする方向にDFがいる</b>ということは、ウィングプレーヤーの<b>シュートに影響を与えてしまう</b>ことになるのは明らかであると言えます。</p> <p>従ってこの状況（レフェリーがオフENSIBフアールではないと判断した）では、ゴールレフェリーは、<u>7mスロー</u>を判定しなければいけません。</p> <p><b>競技規則</b> 8:2b、13:2（アドバンテージ） 6:2c、14:1a、解釈6a（7mスロー）</p>

映像 番号	分 析
9	<p>keyword <b>試合開始直後、ウィング、激しさの程度×影響の度合い、即座に2分間退場、基準づくり、安心・安全なゲーム運営</b></p> <p>判定 7mスロー + 即座に2分間退場</p> <p>分析 この映像から、担当するレフェリーが、<b>開始直後から</b>即座に2分間退場以上の判定をする<b>準備</b>をしつつ、試合にしっかりと<b>集中</b>して臨んでいることが伝わってきます。</p> <p>チームメイトのカバーにきたDFは、ゴールエリアの中から<b>走ってシュータと接触</b>をしたために、ウィングプレーヤーが得ている<b>明らかな得点チャンスを妨害</b>しています。</p> <p>ゴールレフェリーは、<b>穏やかに</b>7mスローの笛を吹き、続けて、<b>激しさの程度、影響の度合い</b>から、即座に2分間退場を判定しています。このゴールレフェリーの判定は、正しい判定と言えます。</p> <p>映像のように試合開始直後から、<b>相手の安全を考慮しないプレーは決して許されるものではない</b>ことをしっかりと示すことは、とても大切なことです。</p> <p>レフェリーは穏やかに振る舞いつつも、<b>強い笛の音色</b>による7mスローの判定と、<b>強いBL</b>を用いた<b>即座に2分間退場の判定</b>を行うことで、「<b>してはいけない</b>」という<b>メッセージ</b>を両チームや選手に伝えることへと、つながっていきます。</p> <p>また映像では、違反を受けた選手はすぐに立ち上がることができていますが、レフェリーは、競技規則8:5（失格）の準備、違反を受けた選手の<b>損傷度の観察、コート上での治療行為</b>なども、状況に応じて対応する必要があります。</p> <p><b>競技規則</b> 8:4 a f、8:3 c d、14:1 a、16:3 c</p>
10	<p>keyword <b>ウィング、DFへの正しい評価、先に位置を取った選手</b></p> <p>判定 プレーの継続（→ 赤チームの得点）</p> <p>分析 映像はウィングプレーヤーのシュートシーンですが、シュートを打つ際に、シューターはDFと接触しています。</p> <p>この状況で、もしもDFに違反があり、明らかな得点チャン스가妨害された場合、ゴールレフェリーは7mスローを判定しなければいけません。</p> <p>ですが、この映像で接触した地点に先に位置を取っているのはDFであり、更に接触の際には、脚（足）や腕、腰等を使うことなく<b>その場で止まっています</b>。</p> <p>以上のことからゴールレフェリーの判定は正しく、レフェリーは<b>プレーを継続させなければいけません</b>（7mスローを判定してはいけません）。</p> <p>ゴールレフェリーは映像のように、違反がなくプレーの継続であることを<b>BL等を用いて周囲に情報を発信</b>することで、チームの次の展開への素早い切り替えにつながることで、この接触の状況をしっかりと観察しての判断であることを示すことにもなります。</p> <p>欲を言えば…速攻に転じ、ゴールレフェリーへと戻るレフェリーは、<b>アウターゴールラインまでしっかりと移動</b>し、ボールがゴールラインを完全に通過しているかを観察したうえで、得点を認めなければいけません。</p> <p><b>競技規則</b> プレーの継続（DFは何もせず、その場で単に立っているだけの状況です）</p>

映像 番号	分 析
11	<p>keyword <b>ペアでの連携、ピボット、ゴールエリア際でのコートレフェリーの役割</b></p> <p>判定 アドバンテージ → 得点 + 即座に2分間退場（白21番）</p> <p>分析 ピボットプレーヤーは、ボールをキャッチする前からDF（白21番）にユニホームやシュートしようとしている腕を捕まえ続けられています。にもかかわらずシュートを打ち、ボールはゴールに入りました。しかしゴールレフェリーは、ゴールエリア内に着地後に決めたシュートであると判断し、7mスロー（罰則はなし）を判定しています。</p> <p>この映像で伝えたいのは、「誰が、どのように判定するか」よりも、「<b>正しい判定をする</b>」ことが大切だということです。</p> <p>映像でDFの違反行為は、コートレフェリーの位置から観察しやすい違反だと言えます（裏を返すと、ゴールレフェリーから選手の体の前面で起きている行為は、DFやピボットの体に隠れて見えにくいと言えます）。</p> <p>これまでの考え方では、<b>ゴールレフェリーが「7mスロー + 即座に2分間退場を判定しなければならない</b>」と指導してきました。この<b>考え方は今でも同じ</b>です。しかし、それによって、映像のようにゴールレフェリーから観察しづらい違反行為に対して、何も判定をしない、あるいは罰則が付かない状況が多々、見受けられました。</p> <p>審判本部では通信機器の利用や、レフェリーによる協議が行われるようになってきたことを受け、「<b>正しい判定を両レフェリーで下していく</b>」という考え方に主眼を置き、「<b>個々のレフェリーの領域分担に基づいた判定</b>」に加え、新たに「<b>両レフェリーで連携・協力しながら正しい判定を下していく</b>」考え方を取り入れていきます。</p> <p>このことは、IHFも「<b>これからのレフェリングスタイル</b>」として推奨しています。</p> <p>そのための研修映像として、この映像が用いられています。IHFは、ゴールエリアライン際のピボットゾーンについて、これまで「<b>ゴールレフェリーが管理する</b>」としていましたが、これからは「<b>ゴールレフェリーの管理を基本としながら、プレーヤーの視野に入るコートレフェリーからのサポートを受け、両方で管理する</b>」方向になると示しています。</p> <p>この考え方は、今後適用される新競技規則「<b>シュートがGKの頭部への直撃とそれに伴う即座に2分間退場の適用有無の確認</b>」にもつながります。シュートがGKのどこに当たったかについて、ゴールレフェリーの位置によっては、正しく判定することができないことも考えられます。その場合、コートレフェリーが、<b>離れた位置からGKの防御動作とシュートの軌道について観察することもできます</b>。ピボットゾーンの考え方をそのまま当てはめると、「<b>シュートの軌道の観察は、ゴールレフェリーの責任領域であることを原則とするが、コートレフェリーからのサポートを受け、両方で観察する</b>」ということになります。</p> <p>そのため映像のような状況において、今後、コートレフェリーが、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 通信機器を活用して、即座に2分間退場を判定するようペアに伝える</li> <li>② コートレフェリー自ら、即座に2分間退場を示す</li> <li>③ ペアで短い競技を行い、ゴールレフェリーをしていた者が即座に2分間退場を判定する</li> </ol> <p>のいずれかの方法で、この違反に対する正しい判定を、ペアと連携し行うことを求めます。</p> <p>以上のことから連携が必要となる映像のような場面において、コートレフェリーの動きは、攻防の切り替えの準備のために後ろに動き始めるよりも、上述①～③の方法でペアで正しい判定を行うために、前へと動き出す必要があります。</p> <p>また映像の状況では、ピボットはDFから捕まえ続けられてはいますが、左手や左足がゴールエリア内に着地する<b>前</b>にシュートを打つことができています（3歩3秒のアドバンテージは、認めなければいけません）。</p> <p>そのためゴールレフェリーは、<b>得点を認め、違反をしたDFに対して即座に2分間退場を判定しなければいけません</b>。</p> <p>競技規則 8:4b、14:2 第2段落、16:3c      /      審判員の目標・研究課題（2021）</p>

映像 番号	分 析
12	<p><b>keyword</b> <b>ピボット、アクションとリアクション、オーバーリアクション、ペアでの連携</b></p> <p><b>判定</b> 事象1：攻撃側の違反（オフエンシブファール） 事象2：プレーの継続</p> <p><b>分析</b> この映像で伝えたいことは、ピボットとの攻防におけるレフェリーの視点（観察技術）です。 まず皆さんに聞きたいのは、以下の2点です。 ◆ ゴールエリアライン際で、何が起きているのか ◆ どちらが先に違反をしたのか（アクションとリアクション）</p> <p>まず<b>1つ目の事象</b>ですが、ピボットの左腕はDFの腕よりも<b>積極的に使用</b>し位置を取ろうとしていることが明らかです。このブロックは許されない行為であり、ゴールレフェリーは攻撃側の違反を判定しなければいけません。更にピボットの左腕は、DFの顔や首と同じ高さで積極的に使用しており、ピボットに対して罰則を与えることも可能です。 後方からの映像シーンでは特に、DFがピボットを引っ張っているように見えますが、この行為は、<b>ピボットの積極的な腕を使ったブロック行為に対するDFのリアクション</b>であると言えます。</p> <p>またこのピボットの行為は、正面（コートレフェリー）から観察することは容易ではありますが、コートレフェリーはベンチ側のサイドライン際に位置を取っているため、観察することが難しいと考えられます。 この事象は競技開始早々でもあり、両レフェリーは<b>ボールやプレーヤーとの間（1対1の空間）が観察できる位置取りを常に取りつつ、BLや口頭、笛などを使った予防的行動を行う</b>ことにより、更なる違反を防ぐための基準づくり、基準を示すことを、<b>開始直後から積極的に</b>行っていただければと思います。</p> <p>次に<b>2つ目の事象</b>は、1つ目と異なり、ピボットが倒れるに値するDFの接触は見られません。 これは、ピボットの明らかな<b>オーバーリアクション</b>であると言えます。 この状況でゴールレフェリーは、<b>プレーの継続</b>を選択する必要がありますが、このピボットプレーヤーの<b>オーバーリアクションの行為は放置してはいけません</b>。 ピボットに対してこのような行為を止めるよう伝えるために、<b>口頭での注意で十分なのか、あるいは段階的罰則を用いたほうがよいのかを判断</b>（OFとなったチームが速攻を仕掛けようとしていないか、競技を中断することで相手チームが不利な状況とならないか、このような行為を行うことが2回目以上か等）しなければいけません。</p> <p>余談ですが、黄色チームの13番のユニホームが少し破れていますが、競技が続行できないと判断されるほどの破損の場合には、ユニホームの交換を求める必要があることも、頭に入れておいてもいいかもしれません。</p> <p><b>競技規則</b> 8:2b、8:1c注（事象1） 8:7d、16:1b（事象2） / 競技ハンドブック</p>
13	<p><b>keyword</b> <b>違反を誘発させる行為（プロボケーション）、スポーツマンシップ</b></p> <p><b>判定</b> 直ちに競技を中断 + 即座に2分間退場（赤34番）</p> <p><b>分析</b> DFが相手の正面に位置を取ることができている1対1の状況で、ボールを持つ選手と接触する前から、攻撃側の違反（オフエンシブファール）があるよう見せかけるために、DFは後ろへと倒れています。</p> <p>映像でレフェリーは、プレーの継続を選択していますが、<b>接触の前からDFが倒れ始めていることが明らかな状況は、罰則を判定しなければならない</b>「合図」とも言えます（試合中、「<b>起こり得る事象</b>」の一つとして、準備をしておいてください）。 映像では、ボールを持った選手もプレーを続ける状況にないため、レフェリーは競技を中断、違反行為を誘発しようとした選手（赤34番）に対して、<b>毅然とした振る舞いで大きくはっきりとしたBL</b>で違反を示しながら、<b>即座に2分間退場を判定</b>しなければいけません。</p> <p><b>ハンドボールがハンドボールであるために、ハンドボールのイメージを守るためにも、私たちはこのような行為を、すぐに排除</b>しなければいけません。</p> <p><b>競技規則</b> 8:7a d</p>
14	<p><b>keyword</b> <b>ゴールキーパー不在、プレーイングエリアからのジャンプ、ゴールキーパーへ適用される規則、プレーヤーのゴールエリアへの侵入</b></p> <p><b>判定</b> 7mスロー（罰則は不要）</p> <p><b>分析</b> <b>GK不在</b>のゴールを狙って打たれたシュートを防ぐため、GK（緑1番）は、ゴールエリアの<b>外から</b>ジャンプし空中でボールをキャッチ、その後、<b>ボールを持ったまま</b>ゴールエリアの中に着地しています。</p> <p>競技規則解釈6cには、「GKがゴールエリアを離れていて、ボールと身体をコントロールした相手が無人のゴールにボールを投げるといふ、誰にも阻止できない」状況は、<b>明らかな得点チャンス</b>であると定義されています。 また、GKがボールを持たずに<b>ゴールエリアを離れたならば、GKはコートプレーヤーに適用される規則に従う</b>こととなります。</p> <p>以上のことからこの映像の状況では、プレーイングエリアにいた（プレーイングエリアからジャンプした）時点で、GKはコートプレーヤーと同じ競技規則が適用されることとなります。ボールを持ったままゴールエリアに着地したGKは、<b>ゴールエリアに侵入し明らかな得点チャンスを妨害</b>していることになり、レフェリーの7mスローの判定は正しいと言えます。</p> <p>しかしながらこの<b>一連の行為はGKによるもの</b>であり、<b>ゴールエリアに入ることが許可されているGKへの段階的罰則は不要</b>となります（映像では、音声のみですが、レフェリーは2分間退場を判定しています）。</p> <p><b>&lt;補足&gt;</b> もしも同様の行為を行ったのがGKではなく<b>コートプレーヤーであるならば</b>、段階的罰則の適用は正しい判定であると言えます。</p> <p><b>競技規則</b> 5:3、6:1、6:2c、解釈6c、14:1a、8:7f、 競技規則運用に関するガイドライン（コートプレーヤーのゴールエリアへの侵入、2018通達）</p>

映像 番号	分 析
15	<p>keyword <b>ゴールキーパー不在、プレーイングエリアからのジャンプ、プレーヤーのボールをゴールエリア内に戻す行為</b></p> <p>判定 相手チームのフリースロー</p> <p>分析 映像14同様、GK不在の状況で、GK（緑88番）はゴールエリアの外からジャンプし、無人のゴールに打たれたシュートがゴールの中に入るのを防いでいます。</p> <p>ただし映像14と異なるのは、そのボールをキャッチするのではなく、空中でコントロールしゴールエリアの中に落とし、自身がゴールエリアの中に入った後に、ボールをキャッチしているという点です。</p> <p>GKが<b>ゴールエリアの外にいる際には、コートプレーヤーに適用される競技規則に従わなければいけません</b>ので、競技規則6：7bに記載されているように、「<b>プレーヤー</b>」が<b>ボールを自陣のゴールエリア内に入れ、そのボールにGKが触れゴールに入らなかつたならば、レフェリーはフリースロー判定しなければいけません</b>。</p> <p>したがってこの映像ではのレフェリーの判断は、正しいと言えます。</p> <p>なおこの映像は、白チームは退場者がいるため、GK不在の状況で攻撃を仕掛けている最中に、白チームの違反により相手チームにフリースローが与えられた場面から始まっています。</p> <p>もしも白チームがOFの際に、コートレフェリーが交代地域側に位置を取っていたら・・・ 交代しコートに戻ってくるGKや、GKと交代しようとする選手とぶつかる可能性が大いにあります。 <b>最悪な状況をレフェリー自身が引き起こさないためにも、チームがGKを不在にし攻撃を行う際のコートレフェリーは、映像のように交代地域とは反対側に位置を取ることも、ここで再度、確認しておきたいと思います。</b></p> <p><b>競技規則</b> 5：3、6：1、6：7b、13：1b</p>
16	<p>keyword <b>負傷したゴールキーパー、ゴールキーパーの救護、保護を目的としての意図した中断</b></p> <p>判定 (味方のコートプレーヤーがボールを保持した瞬間) 競技を中断 + 救護のための入場を許可</p> <p>分析 相手チームの選手が打ったシュートがGKの顔面に当たり、ボールはGKのチームメイトのもとへと跳ね返ってきました。映像ではボールを拾った選手は、すぐに速攻を仕掛け、得点へとつなげています。</p> <p>競技規則運用に関するガイドライン「負傷したゴールキーパー（6：8）」には、「ゴールキーパーがプレー中にボールをぶつけられると、プレーの続行は不可能である。一般的に<b>ゴールキーパーの救護は優先されるべき</b>である」という記載があります。</p> <p>従って映像のような状況でレフェリーは、ボールが顔に当たったGKのチームに対して<b>アドバンテージは認めずに（直ちに競技を中断）、GKの救護を優先</b>させてください。</p> <p>ただし、ボールがGKの顔に当たったからといってレフェリーは慌てて競技を中断せず、<b>まずはボールの行方（どちらのチームがボールを所持するか）を観察</b>した後で、競技を中断させてください。</p> <p>処置後、ボールを所持していたチームが、<b>競技中断時にボールがあった位置からフリースローで競技は再開</b>となります。</p> <p>また、映像の事象において治療を終えたGKは、再び競技に参加することが可能です。 （自チームの3回の攻撃が終了するまでプレーに参加できない（競技規則4：11第2段落）という条文は、適用されません）</p> <p>映像11でもお伝えしましたが、審判本部では「正しい判定を両レフェリーで下していく」という考え方に主眼を置き、 # <b>個々のレフェリーの領域分担に基づいた判定</b>（これまでの考え方） # <b>両レフェリーで連携・協力しながら正しい判定を下していく（NEW）</b> という、「これからのレフェリングスタイル」としてIHFも推奨している考え方を、取り入れていきます。</p> <p>IHFは、ゴールエリアライン際のピボットゾーンについて、「<b>ゴールレフェリーの管理を基本としながら、プレーヤーの視野に入るコートレフェリーからのサポートを受け、両者で管理する</b>」方向になると示しています。</p> <p>この考え方は、今後適用される新競技規則「シュートがGKの顔への直撃とそれに伴う即座に2分間退場の適用有無の確認」にもつながります。シュートが<b>GKのどこに当たったか</b>について、<b>ゴールレフェリーの位置によっては、正しく判定することができないことも考えられます</b>。その場合、<b>コートレフェリーが、離れた位置からGKの防御動作とシュートの軌道について観察することもできます</b>。ピボットゾーンの考え方をそのまま当てはめると、これからのレフェリングスタイルとして、「<b>シュートの軌道の観察は、ゴールレフェリーの責任領域であることを原則とするが、コートレフェリーからのサポートを受け、両者で観察する</b>」ことが必要となってきます。</p> <p>もしも映像のような状況で、ゴールレフェリーがGKに救護が必要なことに気付かない場合、コートレフェリーは、 ① 通信機器を活用して、ペアに伝える ② コートレフェリー自ら、競技を中断する のいずれかの方法で、ペアと連携し行うことを求めます。</p> <p>&lt;その他、参考資料&gt; ※「2021年度 全日本大会担当審判員候補者研修会」資料 「2021年度 全国審判長研修会」資料（所属する都道府県審判長に確認ください） なども参考にさせていただきます</p> <p><b>競技規則</b> 競技規則運用に関するガイドライン（負傷したゴールキーパー：c）、競技規則解釈8c ii</p>

映像 番号	分 析
17	<p>keyword <b>競技終了前30秒間、競技中断中、ボールから決して目を離さない</b></p> <p>判定 7mスロー + DF側GKを失格</p> <p>分析 映像は、<b>競技終了前30秒間</b>での事象です。</p> <p>一枚目のDF（赤66番）は、GKがはじいたボールを相手に拾われまいとゴールエリアラインの外からジャンプしています。DFはボールをはじくことには成功しましたが、ゴールエリアに着地した際に背中にボールが当たってしまいました。そのためゴールレフェリーは、OF側チームにフリースローを判定しています。</p> <p>その直後、<b>相手がすぐにスローを実施することを妨げる</b>ためにDF側のGKはボールを拾い上げ、観客席の方へと放り投げています。</p> <p>この行為は、<b>極めてスポーツマンシップに反する行為</b>です。 レフェリーは<b>毅然とした態度</b>で、相手チームに7mスローを与え、ペアで確認した後、<u>違反を犯した選手（GK・緑）を失格とします。</u> この状況におけるレフェリーの判定は、<b>事実判定</b>となります。</p> <p><b>競技規則</b> 8：10c、16：6b、17：11</p>
18	<p>keyword <b>ファンブル、誰が見ても明らかな違反、試合終盤</b></p> <p>判定 プレーの継続</p> <p>分析 映像は、1点リードしているOFチームのチームタイムアウト終了後、プレーが再開した状況からとなります。</p> <p>映像ではプレー再開後、選手の一人がボールをドリブルした際に、わずかにファンブルしてしまいましたが、再びボールをキャッチしています（競技規則7：7第2段落を参照）。</p> <p>ゴールレフェリーはこの状況で、イリーガルドリブルを判定し、DF側にフリースローを判定しました。</p> <p>この映像でお伝えしたいのは、<b>試合の終盤</b>において、<b>得点差も均衡し、判定によって試合結果に影響を与えかねない</b>という緊張感が高い場合は特に、<b>ボールの所持が変わる判定に関し「誰が見ても明らかな違反」を判定</b>することが、非常に重要となるということです。</p> <p>この状況でわずかなファンブルであればイリーガルドリブルとはならず、レフェリーは、<u>プレーの継続を選択</u>すべきでした。</p> <p><b>競技規則</b> 7：7</p>
19	<p>keyword <b>安易な罰則の適用、些細な違反行為、ボディランゲージ、人間性、タイミング、連携</b></p> <p>判定 プレーの継続</p> <p>分析 レフェリーは、フリーになったピボットにボールが渡る直前に競技を中断し、ピボットへの防御行為（わずかにユニホームを掴んでいる）に対して、YCを提示しています。</p> <p>映像を見る限りDFの行為は<b>些細なもの</b>であり、レフェリーは攻撃を続けるチームに対して、<b>アドバンテージ</b>を認めなければいけない事象となります。</p> <p>もし、結果的にこのような状況に<b>なってしまった</b>場合、レフェリーは<b>人間性を素直に発揮</b>し、攻撃側チームに対して謝ることができるでしょう（もちろん多用はできません）。そのタイミングは、判定をした直後や、攻撃側チームがその後の攻撃で得点を決めた後など、<b>試合の流れの中で対応</b>できることもあり得ます。複数の攻撃が終わった後で、行う必要はありません（チームも次のことを考えているでしょうし、レフェリーもそのことを引きずってはいけません）。</p> <p>また、通常ゴールエリア際での攻防は、ゴールレフェリーが判定することになります。ですが、映像のようにゴールエリアライン際のピボットの攻防は、どのプレーヤーが最初に違反したかを見極めつつ、<b>コートレフェリーも連携して管理</b>をする必要があります。</p> <p>そのためゴールレフェリーからコートレフェリーに対し、<b>通信機器やアイコンタクトを有効活用</b>し状況を伝えることで、プレーの継続を認めつつ、攻防の中で<b>コートレフェリーからBL</b>を用いて、この行為を注意することもできたはずで。</p> <p>あるいはボールの展開を把握しアドバンテージを認めた上で、シュートの行方を確認した後からでも、人間性を発揮させつつ当該選手に対して<b>必要に応じてBLを用いながら、または口頭で、更なる違反行為へ発展しないよう</b>情報を発信していただければと思います。</p> <p>例えば映像の状況で罰則を適用しなければならぬ違反があったとしても、違反をされた側が不利益（例えば、映像のように違反をされた側（OF）が明らかな得点チャンスを得たタイミングでの中断）となった場合、レフェリーの信頼が失われてしまうことにもつながってしまいます。</p> <p>レフェリーは競技を早まって中断せず（<b>違反をされた側が不利益とならないよう</b>）、状況を見極めた上で競技を継続させ、その後、落ち着いて罰則の適用と、正しい再開方法を選択してください。</p> <p><b>競技規則</b> 13：2、14：2</p>

映像 番号	分 析
20	<p><b>keyword</b> アクションに対するリアクション、競技中断中、タイミング、ハンドボール競技の特性とゴールエリア</p> <p><b>判定</b> ボールを持つ選手を即座に2分間退場 + フリースローを判定した位置からそのままOFチームのフリースローで再開  <b>※</b> 報告書を伴わない失格の判定でも可。即座に2分間退場を示す場合、通常の2分間退場とは区別し示すことを求める。</p> <p><b>分析</b> 映像では、1枚目のDFとフォローにきたチームメイトの2人で、ボールを持つ相手選手のカットインを防いでいます（<b>アクション</b>）。レフェリーのフリースローの<b>笛の直後</b>、ボールを持った選手は、相手を振り払おうとボールを使って大きく動いています（<b>リアクション</b>）。</p> <p>ボールを持ったプレーヤーは、レフェリーの笛の後も動きを止めることなく、相手を押し倒していることから、このプレーヤーに対してレフェリーは、<b>少なくとも即座に2分間退場を判定する必要があります</b>。  <b>ただし</b>、この判定を適用する際にレフェリーは、<b>人間性に加えて強い笛とはっきりと大きなBL</b>を用いて、通常の2分間退場よりも<b>重い、限りなく失格に近い違反行為であることを発信</b>しなければいけません。</p> <p>もちろん、失格の判定もあり得る違反行為となるため、失格を適用することも可能となります。ですが、ボールを持った選手のリアクションは、相手への攻撃的な動作ではなく、<b>相手を振りほどくための行為</b>であり、「ボールをぶつける」「殴る」といった行為ではないことから、失格を適用する場合は、競技規則8：9 f より<b>報告書を伴わない失格を適用することになります</b>。</p> <p>そのボールの所持・再開方法は、<b>すでに競技はコートレフェリーのフリースローの笛で中断しており、中断後の違反においてボールの所持や再開方法が変わることはありません</b>。</p> <p>しかし、ここで最も皆さんにお伝えたく、レフェリーとして大切なことは、このボールを持った選手の行為は「<b>防ぐことができた</b>」ということです。</p> <p>この映像では、違反行為は双方のプレーヤーに見られます。違反を犯した選手が、「<b>なぜこのような行為をしたのか</b>」という視点で、もう一度、映像をみていただければと思います。  この要因となったのは、いくつか考えられます。</p> <p>&lt;1&gt; ボールを持つ選手は相手チームの<b>キープレーヤー</b>でもあることから、レフェリーの笛の合図があるまでDFは全身を使って必死にボールを抑えに行く気持ちも理解できます。  しかし、2人目として接触してきたDFは、ゴールエリア内に安易に入り込んできています。すでに1対1の攻防が行われた後に、ゴールエリアを無視して接触を試みているように見えます。この場合、ボールを持ったプレーヤーからすれば、<b>本来いるはずのないプレーヤーが、攻防の後に遅れて入り込んできたということに違和感</b>を感じてしまい、映像のように「しつこい!」と振りほどく<b>リアクション</b>を起こさせてしまったと考えられます。</p> <p>&lt;2&gt; レフェリーの<b>笛が遅れたこと</b>  4歩目を踏んだ：フォローにきた選手が接触した時点で吹くことが望ましいタイミングだと言えます。  また、OFプレーヤーがリアクションとして振りほどいた段階で、強い笛を吹き、それ以上のことを起こさせないように注意喚起することもできたと考えられます。</p> <p>レフェリーは、この状況を防ぐためにも、「<b>発展性がないと判断した時点で、競技を中断する</b>」「<b>何か起こりそうという状況において特にコートレフェリーは、笛を吹く前から前進し近づいていく</b>」こと、そして起こった際には、毅然とした態度で適切に対応すること（準備も含む）が必要となります。  また、ハンドボールにおいて<b>ゴールエリアは競技の特性につながる聖域</b>です。<b>この領域を軽視する行為について、適切に対応することが求められます</b>。</p> <p><b>競技規則</b> 8：3、8：4 c、8：9 f、13：3</p>

## &lt; 研修映像URL &gt;

映像 1	<a href="https://youtu.be/GqtTqg5dszo">https://youtu.be/GqtTqg5dszo</a>	映像 11	<a href="https://youtu.be/AhzzQ8U3CPM">https://youtu.be/AhzzQ8U3CPM</a>
映像 2	<a href="https://youtu.be/4BtNUSdiNgU">https://youtu.be/4BtNUSdiNgU</a>	映像 12	<a href="https://youtu.be/0mOOuK3hQIU">https://youtu.be/0mOOuK3hQIU</a>
映像 3	<a href="https://youtu.be/9a5YuZABzw0">https://youtu.be/9a5YuZABzw0</a>	映像 13	<a href="https://youtu.be/KpmzEXBBWQs">https://youtu.be/KpmzEXBBWQs</a>
映像 4	<a href="https://youtu.be/EuaNXZhfqI">https://youtu.be/EuaNXZhfqI</a>	映像 14	<a href="https://youtu.be/sfTfR9GwA0k">https://youtu.be/sfTfR9GwA0k</a>
映像 5	<a href="https://youtu.be/2vvYEUuAqc">https://youtu.be/2vvYEUuAqc</a>	映像 15	<a href="https://youtu.be/VaoqiAAGfhl">https://youtu.be/VaoqiAAGfhl</a>
映像 6	<a href="https://youtu.be/oqCB2IEInoM">https://youtu.be/oqCB2IEInoM</a>	映像 16	<a href="https://youtu.be/zh-tYSQ4abw">https://youtu.be/zh-tYSQ4abw</a>
映像 7	<a href="https://youtu.be/t5ra2OeAVFE">https://youtu.be/t5ra2OeAVFE</a>	映像 17	<a href="https://youtu.be/LTm-2gMZ0ZE">https://youtu.be/LTm-2gMZ0ZE</a>
映像 8	<a href="https://youtu.be/diQIgnGeOjQ">https://youtu.be/diQIgnGeOjQ</a>	映像 18	<a href="https://youtu.be/NWDvHGFbtt8">https://youtu.be/NWDvHGFbtt8</a>
映像 9	<a href="https://youtu.be/xNHgwgqyazh4">https://youtu.be/xNHgwgqyazh4</a>	映像 19	<a href="https://youtu.be/xyOrEnHib44">https://youtu.be/xyOrEnHib44</a>
映像 10	<a href="https://youtu.be/3gUsQQib9r4">https://youtu.be/3gUsQQib9r4</a>	映像 20	<a href="https://youtu.be/M3gvOb_szZM">https://youtu.be/M3gvOb_szZM</a>

&lt; 問い合わせ先 &gt;

公益財団法人 日本ハンドボール協会  
審判本部長 福島亮一  
futkun1212.jp@yahoo.co.jp